

京都のフォーク文化 若者目線で見直す

フォークソングの聖地京都で、若手劇団がフォーク全盛の時代を見つめ直す舞台「京都で、恋とフォーク」が今月、京都市内で上演される。「戦争を知らない子供たち」(ジローズ)、「友よ」(岡林信康)など京都で生まれた懐かしのメロディーを盛り込み、新旧文化の入り交じる京都を浮き彫りにする。

ギターを持った9人が1列に並んで二音に「友よ」を弾き歌う。フォークソング全盛期を知らない20〜30代の若い俳優にとっては、初めての経験でリズムと音程を合

わせる難しさに苦闘する。演出上重要な意味を持つ、かつてのフォークソングを再現する場面。稽古は何度も繰り返された。

京都市を拠点に活動する劇団「夕暮れ社 弱男ユニット」の新作。「関西フォーク」の聖地京都に憧れ、岐阜県から京都の大学に進学した女子学生を主人公に展開する。フォークソング同好会に入ったものの、反戦や反権力といったかつての理念を忘れ、目に見える世界だけを歌い上げる周囲のメンバーたち。反戦や反権力といった「真面目な」価値観を歌うこ

東山で27〜30日 懐メロ盛り込む舞台上演



「何らかの形で次世代に」

とに気恥ずかしさを訴える仲間
に、葛藤する。

作・演出は京都市出身の村上慎太郎さん(35)。2年前、東南アジアでギターを手に3週間滞在し、毎日一曲を作詞作曲した。「見た物や感じたことを表現するには一番だった」とフォークソングの魅力を見いだした。

オリジナル曲も間に挟み、若者の隠れた思いを表現する。村上さんは「京都のフォークソング文化を何らかの形で次の世代につなぎ、残したい」と語る。

公演は27〜30日、京都市東山区の市東山青少年活動センターで計6回。2300円(当日500円増、25歳以下は割引)。問い合わせは制作の前田さん090(9696)4946。(住吉哲志)

息を合わせた演奏を目指し稽古する「京都で、恋とフォーク」の出演者たち「京都市東山区・市東山青少年活動センター」